
マドロミマボロシ

外来人in無縁塚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マドロミマボロシ

【Nコード】

N2598L

【作者名】

外来人 in 無縁塚

【あらすじ】

人が蝶の夢を見るのか、蝶が人の夢を見るのか……五感によつてしか世界と触れ合えない人間に、その螺旋の果ては見えない。流れゆく学園都市の日々。それが不変であればあるほど、異常はたちどころに住人を蝕んでいく。自傷、発狂、失踪 軋んでいく日常。混乱を抜け出し元凶と対峙出来るのはただ一人、無能力者の上条当麻だけだった。

明滅する思考（前書き）

いわゆる二次創作小説ってやつです。オリキャラとか出ます。初投稿です。それでもいいならどうぞぞー！！

明滅する思考

急激な変化に人は敏感だが、緩やかな流れに乗せられていることには、存外気がつかないものである。

どこまでが正常でどこからが異常か……人は無意識に線引きし、他者との触れ合いの中で境界を定めていく。

物を盗つてはいけません。約束を破つてはいけません。人を殺してはいけません。

そういつた掟は……しかし近くの人と顔を見合わせて作ったものだから、知らない場所の知らない人達のそれとは大きく異なる場合もある。

例えば食人風習。

西洋圏では大禁忌もいところだが、歴史を紐とけば、例外で片付けられない数の民族がそれを当たり前のこととして受け入れていた事実がある。

それが「正常」か「異常」かなど語る方がナンセンス。包丁と電子レンジどちらが便利かと問うより意味がない。

それならば、と少女は調査のついでにキーボードを叩いていく。超能力を得るために、脳を開発するために、人が薬品の静脈注射、耳から脳へ電極を刺す等の行為を受けさせられるのは正常か異常か。超能力者の遺伝子を元に、軍用のクローン人間を作り出すのは正常か異常か。

そんな状況を当たり前として受け入れるのは、正常か異常か。少女はそんな質問を、自作の心理テストに混ぜネットへ流してみる。結果を見ても、彼女に思うところなど別に無い。元々重要度の低い彼女にしては極めて珍しい「気まぐれ」から得られた情報に、価値などあるうはずもない。

奇を衒ったような回答を除いて、そのほとんどが「イカれてる」に集約されていた。

それが現実に行き起きていることだと知ったら、回答した人間は驚くだろうか。少しだけ想像を巡らせたが……それだけだった。感想なんて何も無い。

少女はメモリーを開いて指令内容を今一度確認した後、ノートパソコンの電源を落とす。

簡素なビジネスホテル。ただ体を休めるだけの一室。唯一の光源である青白い画面が消え、辺りは闇に包まれる。

少女はベッドへ寝転がるでも無く、机に向かったまま、ただぼんやりと中空を眺めていた。

その瞳に生氣はない。

光の無い室内よりも暗い、全ての色の絵の具を溶かし合わせたような濁った黒。

微かに浮かぶ疑問の光が、かろうじて意思を持った生き物の眼であることを主張していた。

「……正常は異常でないこと。異常は正常でないこと。果たしてどちらが先なのだろうね」

一人呟きながら、石像のように動かなくなる。

意識的に動きを止めている……というレベルではない。その姿は二度と動き出さないのでは、と見る者に思わせる、完璧なまでの静止であった。

ただその視線だけが定まらず、思考に合わせて瞳孔の中を漂う。

「正常の中の正義は、異常の中での悪になるのかな……それじゃありとあらゆる世界に共通の倫理は、果たしてないのか……」

そんなこと考えたって仕方ない。100人が100人そう答えるような問い。

しかし少女は止めようとしない。それも必死に答えを見つけようという素振りもなく、歯車の惰性で思考しているような、気だるげな表情を浮かべたまま。

正常どころか異常からも外れてしまった、最果て能力。それを持っているが故に世界の全てが色褪せて見える少女は、そんなこと

を考えるぐらいしか暇の潰し方を知らなかった。

前後不覚な捕り物 1

東京西部に位置する学園都市。230万超の住人を抱えながらも、そのほとんどが学生であるが故に、平日の日中は大通りですら閑散とした様相を見せる。

廃棄された区画には群れることしか出来ない不良が溜まってはいるが、それにしても全体的には微々たるものである。ひっそりと息を止めている街中を白井黒子は歩く。

その顔には隠そうともしない苛立ちの色が浮かんでいた。

（まったく腹立たしい！こんな曖昧な現状把握しかしてないくせに風紀委員に指令を出すなんて。公欠出せば黙るとでも考えてるのかしら）

白井黒子は学校の授業というものが嫌いではない。確かに足並みを揃えるために進度が調整されるのはもどかしくはあったが、それでも勉学の意欲が失われる程ではない。

そこは天下の常盤台中学。多少スピードが緩まっても十分に高度な内容なのだ。

しかしそれは不機嫌の主たる原因ではない。

（ああ、今日は注文していた『薬』^{くすり}が届く日ですのに！この分では報告書やら何やらでどんなに早く終わっても就寝時間過ぎの帰宅は必至！お姉様に一服盛るタイミングを逸してしまいますわ！）

ぶんすか、と擬音がつきそうな膨れっ面になる白井黒子。その表情は世間一般の「お嬢様」の印象からは外れていたが、歳相応の可愛らしさが表れたものであった。

最もそこに至るまでの思考過程は若干の問題を孕んでいたが……と、漠然と索敵範囲を捜査していた彼女の足が止まる。

（やれやれ、見つけましたですの。手間かけさせて……）

丁度20メートル前方の位置にかけられた鉄橋の上。その中程でタワーゲットは手摺にもたれていた。

墨に一滴青を垂らしたような暗い色の髪。眼がちらつきそうな黒と赤のチェックのワンピース。そしてそんなパンクな恰好に似合わない、病的に白い肌。

その姿は色々な意味で武骨な鉄の質感から浮いていた。それこそ、かなりの距離を挟んでも認められる程に。

幸いにもこちらに背を向けているため、慎重に接近すれば気付かれる恐れも少ない。最も、既に空間転移の能力射程に収まってはいるのだが。

さて……と白井黒子はその場で立ち止まり、頭の中で指令の内容を反芻する。

早い話が侵入者の捕捉。最近やけに増えている不届き者の外部者の一人を連行しろという、単純な任務。

しかし状況は普段と少々毛色が違っていた。それこそベテランの風紀委員が足を止め、慎重に戦術を練り直す必要がある程に。

（『どうやって侵入されたか分からない』……寝惚けているような台詞ですが、複数人の警備員がそう結論している以上、シエスタの最中に見落とししました、は無さそうですね）

有志の自警組織にそんな人間がいるわけありませんが……と結論しつつ、頭の中でそれまでに得た情報を整理していく。

そもそも今回の件が発覚したのは、学園都市と外をつなぐゲートに設置されているカメラに、ID登録もされていなければ認可が下りた業者でもない不審人物が映りこんでいたことによる。

ちよつと聞いただけでは別になんていうこともない報告だが、よくよく考えればこれは立派な異常事態である。

そう、24時間警備員の誰かしらが詰めているのだから、カメラにより発見なんていう以前にその警備員自体が侵入者を感知していなければおかしいのだ。

これだけなら、あるいは気が抜けていたか睡魔にたぶらかされていた間にこっそり侵入した、と考える事もできる。しかしカメラは更に不可解な事に、『警備員の前を堂々と通り過ぎる侵入者の姿』を

捉えている。

映像を確認した人間が奇抜な服装に眼が止まり、映像を見ているうちに認可証を出している様子が無かったことに気がついたために明らかとなったが、下手をすれば発覚すらない怖れもあった今回の騒動。

当然当直だった警備員は事情聴取されたが、「見落としてはあり得ない。勤務時間に強行突破した人間は存在しないはずだ」と口をそろえて答えるばかり。

手がかりはおろか情報すらまともに入っていない状態。重傷者3名を出した以前のもとは、また異なった方向に不気味な事件。

（十中八九、相手は読心能力者^{サイコメトラー}……それも何の齟齬も残さず記憶を改竄している事から考えて、『心理掌握^{メンタルアウツ}』に迫る実力……厄介ですわね）

最も攻めあぐねる程ではない。

空間転移して手錠で鉄橋の手摺に繋ぎ、直ぐにその場から離脱。応援を呼ぶ。

任意同行に固執しなければ、これが一番堅い方法。奇襲をかければいかな催眠や暗示に長けた能力者だろうと、現状を把握するために一拍反応が遅れる。そして戦闘体勢が整った時には、もう手の届かないところにいるという寸法だ。

シユミレートが完了した白井は、直ぐ様虚空を渡る。

瞬きする間もなく、相手の背後に出現。

視界を占める趣味の悪い柄の服。敏感に気配を感じとったか、ターゲットは振り返る素振りを見せるが、既に手錠を降り下ろしている彼女には関係ないことであった。

手摺の細い箇所と紙のように白い手首を繋ぎ、首尾良く再び空間転移する。

……はずだった

「え？」

手首の方へ振り抜かれた手錠は、何物にも食らい付くことなく、た

だ宙を撫でるのみ。

不可避の一撃は、しかし対象が消えてしまうことで避けられてしまった。

ぞつ、と白井の背中を冷たい汗が流れ落ちる。

自信満々の一撃がかわされたから……ではない

読心能力者であるはずの相手が、空間転移としか思えない能力を使用したためだ。

あり得ない。そんな方法で避けられることなど考慮しないでいい要因だったはずだ。

(多重能力者!?まさか……でも……)

もう一人、能力を持った協力者がいたのか　だが周囲に人影はない。双眼鏡で見ながら間に合わせられるようなタイミングでは無かった。

「どういった、ご用件、でしょうか?5分、ほど、でしたら、時間を、作れますが」

その場で固まる白井の背後から、深いアルトの声がかけられる。

心のざわめきを必死で押さえ、ぎこちなく背後を、見る。

手錠にかかっていたいなければならないはずの少女が、そこにいた。

後ろから見ただけでは分からなかった瞳の漆黒が、冷たくも暖かくもない視線で風紀委員を射抜く。

まるで着色を忘れたフィギュアのような、白すぎて逆に魅力を減じている容貌。

その顔には、一切の表情と呼べるものが無かった。

「……ご丁寧にどうも。もう少しばかり時間を頂ければ言うこと無しなんです」

白井は不遜な笑みと共に、なんてことは無い軽口を返す。その意図は勿論時間稼ぎにある。

もはや詰みも同然の状態。読心能力を使われれば、もうこの場で何をしたらと先で先を読まれて対応されてしまう。

しくじるだけならまだいいが、逆に命に関わるようなカウンターパ

ンチを食らう可能性もある。能力使用の前後は得てして隙が出来るものだ。

今の彼女に出来るのは、偶然通りかかったジャッジメント風紀委員か警備員がアンチスキルこの状況を正しく把握し、応援を呼んでくれるまで会話で引き伸ばすこと……だけである。

後は出来るだけ手がかりを探り出して、潮時となったら記憶を消去される前にむしろこちらから逃げ出す、か。

(最も、そんな考えも読まれてしまっているのでしょうか……)
手詰まりか、と笑みに諦観の念を混ぜて……

「あなたは……随分と、可愛い、お顔立ちを、されて、いるのですね」

予想の斜めを超えた一言に、はい？と頬をひきつらせた。

前後不覚な捕り物2 (前書き)

敵能力に相応しい四字熟語を模索中。

前後不覚な捕り物2

「あなたは……随分と、可愛らしい、お顔立ちを、されて、いるのですね」

絶句……せざるを得ない。

風紀委員と知って挑発してるとしか思えない、あまりにも場にそぐわない発言。

一体どんな意図が……とまじまじと相手の顔を見つめると、次なる驚きが彼女を襲った。

(笑っている……?)

先ほどはデスマスクもかくやというひどい表情をしていた少女が、白井の顔を見て微笑んでいるのだ。

宗教史は人並み程度にしか明るくない彼女にも、その笑顔は聖母のような温かいものに思われた。

無垢な子供が、ふと目にとまった花を愛でる。そんな何の打算も無い姿。

(心理操作されている……? いや、確かに笑顔を浮かべている以上、これは紛れもない私自身の印象ですわね)

笑みに限らず、表情は見る人間が見れば嘘か真か分かってしまう。目の周囲の筋肉の緊張、口角の上がり方……挙げればきりが無い。

仕事柄そんな表情の読みを行うことの多い彼女の経験、知識が、相手の笑みが本物であると告げていた。

それ故に、不可解。

「お褒めに預かり光栄ですわ……ところで、こんなところで何をされていたのです?どこに行きたい場所があるのですしたらご案内しましょうか?」

とりあえずは一步、間合いに入り相手の出方を伺う。

一見無駄な会話とも思えるが、詰問ではない何気ない疑問に対して

は、意外と警戒心が働かないことが多い。

じわじわと、外堀から埋めるように情報を得ていく。焦りは禁物。時間が長引けば有利になるのはこちらなのだから。

(……それにしても、この態度。読心能力を使っているにしては少々不自然な……)

多かれ少なかれ、心を読んでいる時は、それを示唆するような特有の言動、仕草が出てくるものだが、目の前の少女にはそれがない。四六時中能力を使っているわけでもなかるうが、追っ手を前にした今この時こそ使うべきではなかるうか。

(そもそも読心能力という前提が間違つて……？いや、空間転移ではあのカメラの映像が説明できませんし……)

思考の深みに嵌まり掛けた白井に、少女は言葉をかける。

「ええ、目的地は、あるのですが、今、鉄橋に寄りかかって、いたのは、道に迷ったから、では、ありません……正義と、悪について、考えていたんです」

切れ切れた返答に思考を寸断され、つられて「はあ……そうなの」と反射的に答えてしまう。

どうにも会話というものは、意図的に無視しなければ続いてしまうものらしい。

「何が正義で、何が、悪なのか、私には皆が言う、漠然とした、それらが、良く分かりません……」

少女は遠くへ目を向けつつ、そんな呟きを漏らす。

その瞳は何を映しているのか、雲の動きに合わせるようにゆらゆらと揺れていた。

こちらへの興味を失ったような様子に、今がチャンスか……とさりげなく予備の手錠へ手を伸ばす。

この距離ならわざわざ振り回さなくとも、直接手錠を空間転移させればこと足りる……が。

(駄目ですわね。それこそ空間移動されれば手錠の意味なんて何も無いのですし。あーもどかしい！いっそのこと矢を体に打ち込んで

……)

ぎり、と齒ぎしりしながらも、白井はその動作に移れない。元々誰を傷つけたわけでもないただの侵入者。そんな相手の肉体に矢を打ち込むのは彼女の信条に反するからだ。

何を考えているのか分からない、隙だらけの姿を晒しているのに、肝心の攻め手が思いつかない。

やはり、逃げられないように細心の注意を払って会話するしかないのか。

そう考えた瞬間だった。

「そういえばその腕章、ジャッジメント風紀委員の、ものですね。もしかして、私を、捕まえる、おつもりですか？」

「え？あ、いや……」

変化は唐突だった。

そのまま宙に溶けてしまうのではないかと思われた少女が、いきなりこちらへ向き直ったのだ。

そして脇腹を短刀で突くような、鋭い問いを投げ掛ける。

呆けていた相手からの思わぬ反撃に、白井は咄嗟のことどうまく返せない。

時間の経過と共に緊張が緩んでいたのは、彼女もまた同じであった。言葉に詰まった彼女に、少女はふむ、と指を口元に当てる。

いつの間にかその表情は、先ほどのマネキン染みた非人間さを取り戻していた。

「そう、ですか。追われて、いるのですね……今、捕まるわけにはいかないのですが、貴女は、可愛らしいですし、追うための、ヒントを、差し上げましょう。……一つ、私の能力は、『開かれる前』、ではなく、『開かれた後』、に観測します」

「……それは、」

どういう意味ですか、と聞く間も無かった。

「……」

呟き、少女が後ろに下がった途端、その姿が宙に溶ける。

ふわりと、揺らめくことなく、容赦なく。

黒板の落書きを消すようななんの予兆もない消失だった。

(……………!?)

逃げられた、と全身に冷や汗が流れるが……………その直後。

白井黒子を中心に広く影が落ちた。

勿論、周囲にはそれを為しえる高い建物も樹木も存在しない。心に走った予感に従い上を見る。

頭上40メートルの位置に、鉄骨が浮かんでいた。

勿論翼を持っているわけでも無ければ、水銀面に浮いているわけでも無い鉄骨がそのまま静止しているはずもない。

重力に引かれ、巨人の拳を思わせる一撃が天から落ちてくる。

並みの人間であれば、その光景の異常さから、迫り来る脅威を脅威とも認識できず潰されてしまうだろう。

しかしそれなりに修羅場を潜ってきた彼女にとっては、そんな致命的な隙を晒すなどあり得ないことだった。

目にした瞬間、ほとんど無意識に計算式を組み上げ、避けられる場所へと転移。そして直後に訪れるであろう地を揺るがす衝撃に身構える。

が。

(ま、また……………!)

体勢を低くする白井の目の前で、コンクリートの路面に接触した途端、鉄骨は再び消えてしまっていた。

思わず彼女は辺りを見回してしまう。

鉄橋付近は開けているため、それこそ何kmも動かさない限り、移動させても目の届かないところに入ったとは考えられない……………が、周囲には鉄骨の影も形も見当たらない。

まるで立体ホログラムのように、自在に出現消失する鉄骨。

能力の正体を片鱗も掴めない事態など、白井に限らずほとんどの人間が経験したことがない。能力それ自体にあまり価値を見いださない学園都市の風潮もあるが、一人一能力の大原則がある以上、正体への筋道を辿るのは頭を使えば難しいことではないからだ。しかし、今は逆にその原則に縛られる。

これほど大規模な心理操作と空間転移では、どう考えても大元の能力に結び付かない。

啞然となる白井の背後から、女性のものとしては低い声かけられる。

「……三つ。これで、最後です。それでは、さようなら」

頭に触れたナニかは酷く冷たくおぞましく。

それが掌だと理解した途端、白井黒子と少女の世界は断絶した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2598/>

マドロミマボロシ

2010年10月13日17時59分発行